

[看護研究]

ウォーキングカンファレンス導入後の成果と課題

尾道市立市民病院 看護部

越智 崇, 真田 奈美, 旗手 みちる, 窪田 有里

要 旨 高齢化と認知症患者の増加, 在院日数の短縮など, 病棟看護師の業務は今後ますます複雑化・繁雑化すると予測され, 職場環境を整えることが重要である. そこで申し送り時間の短縮・簡略化・患者の安全面に着目し申し送りの見直しを行った. その方法として, 前勤務者と共に患者の状態を観察し, 患者に直接症状を問いながら申し送りをする患者参画型のウォーキングカンファレンス (以下, WCF) を導入した. 先行研究では, WCF の有用性が述べられており, 本研究では患者参画型の WCF 導入後の成果と今後の課題が明らかになった. 結果, すべての看護師が WCF の継続を希望した. さらに看護師にとって患者の状態を正確に把握でき, また複数人でアセスメントをすることで患者の安全管理や異常の早期発見ができる教育の場としても有益であった. そして, WCF は直接患者に語りかけ情報共有することで, 信頼関係の構築に繋がり, 患者の安心感や満足感などの精神的安寧へも効果が得られた. 一方で患者のプライバシーへの配慮といった問題点が明らかとなり, 今後は患者側の意見を取り入れた WCF の充実を図る必要が示唆された.

Key words: ウォーキングカンファレンス, 申し送り, 患者参画

はじめに

当病棟は外科・消化器内科の混合病棟で, 患者は手術・検査目的で入院し, 患者の入れ替わりの多い病棟である. 入院患者の多くは高齢者であり, 認知症を伴う患者も少なくない. そのため, 病棟看護師の業務は今後ますます複雑化・繁雑化すると予測され, 職場環境を整えることが重要と考えられる.

当病棟では, 申し送り前に受け持ち患者の病室を訪室・挨拶を行い, その後ナースステーションで申し送りを行っていた. しかし, 申し送り時間に個人差があり所要時間が長くなる傾向にあり, 看護ケアの開始時間が遅くなることですべての業務が遅延することが問題であった. そこで, 情報収集方法を統一することで申し送りの簡略化, 時間を意識した

申し送りの短縮ができるのではないかと取り組みを始めた.

看護ケアや処置の開始時間が遅れる現状に対しては, 患者メモの記載項目を周知し, ポイント申し送りを行うことで簡略化を行った. そして時間管理の意識付けを行うためにタイムスケジュールの作成を行い, 申し送り方法の見直しを行った. その方法としては, 前勤務者と共に患者の状態を観察し, 患者に直接症状を問いながら申し送りをする患者参画型の WCF を導入した. 先行研究において中村ら¹⁾は「必要な情報の選択と優先度の高い情報が絞れ, 的確なショートカンファレンスと時間短縮へつながる」と報告されている. また, 「日勤開始時に担当を伝えることは責任の所在が明確となり, 患者の安心

Results and Challenges after The Walking Conference

Nursing Department, Onomichi Municipal Hospital

Takashi OCHI, Nami SANADA, Michiru HATATE, Yuri KUBOTA

感につながると実感したことが推測される」と述べられており、看護師間・看護師と患者間の有益性が報告されている。そこで、看護師へのアンケート調査を行い、WCFへ変更後の成果と今後の課題を明らかにすることを目的に本研究に取り組むこととした。

研究の目的

WCF導入後の成果と今後の課題を明らかにする。

用語の操作上の定義

1. ウォーキングカンファレンス(WCF)とは、ベッドサイドで患者を交えて深夜勤務者と状態の引き継ぎを行い、その日の予定を話し合うことをさす。
2. 患者メモとは、当病棟で作成した看護師間での情報共有ツールをさす。

研究方法

1. 研究デザイン
アンケートによる調査研究

2. 研究対象

病棟師長を除く病棟看護師 18 名

3. 調査方法

アンケート内容は、西野²⁾、高宮³⁾、中村¹⁾、大月⁴⁾らの先行研究を参考に、独自で作成した(表1)。

4. データの収集方法

アンケート配布期間：2020年2月～2020年3月までの期間

アンケート収集方法：留置法

5. データの分析方法

アンケート内容で得られた結果を単純集計し、内容を分析する

倫理的配慮

対象者に対して、調査の目的と方法、アンケートは無記名記載とし個人を特定できないよう処理を行う。アンケート調査は自由意思であること、拒否をしても不利益は無いことを口頭と文書にて説明し同意の有無を確認する。

表1 ウォーキングカンファレンスについてのアンケート内容

問1. WCFを開始してよかったですか はい いいえ どちらでもない	問6. 申し送りを充実させるため、円滑に進めるために気をつけていることがありますか はい いいえ どちらでもない
問2. WCFは患者にメリットがあると思いますか はい いいえ どちらでもない	問7. 申し送りの際に変わった事・注意するようになった事がありますか はい いいえ どちらでもない
問3. WCFは、インシデント等患者の安全面に対しても効果的であると思いますか はい いいえ どちらでもない	問8. 患者のプライバシーに配慮していますか はい いいえ どちらでもない
問4. 情報共有はスムーズに行えていますか はい いいえ どちらでもない	問9. 今後もWCFを継続したいと思いますか はい いいえ どちらでもない
問5. 申し送り終了までの時間は短縮されましたか はい いいえ どちらでもない	

結 果

回答者 15 名で、回収率は 83%であった。各問の自由回答については回答内容をカテゴリー化した。

「WCF を開始してよかったですか」として「はい」13 名 (87%)、「いいえ」0 名、「どちらでもない」2 名 (13%) であった (図1)。自由回答では【情報共有】【時間短縮】【患者参画】にカテゴリー分けをした。内容の詳細は、【情報共有】「患者の状態を共有しやすい」8 名、「ドレーンの排液や創の状態を確認できる」3 名、【時間短縮】「時間短縮に繋がっている」3 名、「短縮されたことで精神的に楽になった」1 名、【患者参画】「患者を交えて、時には医師の参加もでき有意義なものになっている」1 名であった。

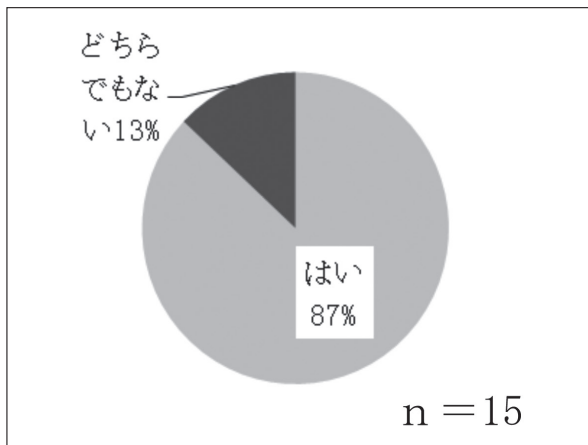


図1 WCF を開始してよかったですか

「WCF は患者にメリットがあると思いますか」では「はい」12 名 (80%)、「いいえ」0 名、「どちらでもない」3 名 (20%) であった (図2)。自由回答では【患者の安心感】【患者の安全・インシデント予測】【情報共有】【患者参画】にカテゴリー分けをした。内容の詳細は、【患者の安心感】「患者にスタッフ全員で関わっている、申し送りがちゃんと行われていると感じてもらえる」6 名、「安全にケアが行われていると感じる」1 名、「担当の看護師が交代することが明確に伝わる」1 名、【患者の安全・インシデント予測】「指示などのミスが減る」1 名、「身体抑制の評価ができる」1 名、【情報共有】「その場で相談や確認ができる」2 名、「状態をよりリアルに知り、観察やケアに活用できる」3 名、「創部やドレーン挿入部など一緒にチェックするようになった」1 名、【患者参画】「検査や手術などその日のイベントと注意点を患者と一緒に確認できる」1 名であった。

「WCF は、インシデント等患者の安全面に対しても効果的だと思いますか」では「はい」14 名 (93%)、「いいえ」0 名、「どちらでもない」1 名 (7%) であった (図3)。自由回答では【患者の安全・インシデント予測】【情報共有】【患者参画】にカテゴリー分けをした。内容の詳細は、【患者の安全・インシデント予測】「不穏、認知症のある患者の状態を共有し、身体抑制についても確認しアセスメントできる」4 名、「ドレーンや創部状態の観察」3 名、「ドレーン

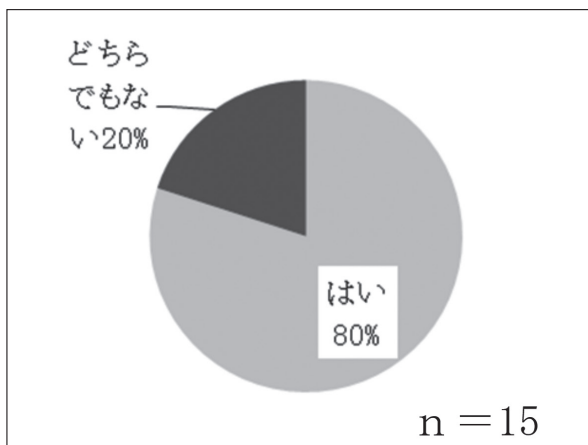


図2 WCF は患者にメリットがあると思いますか

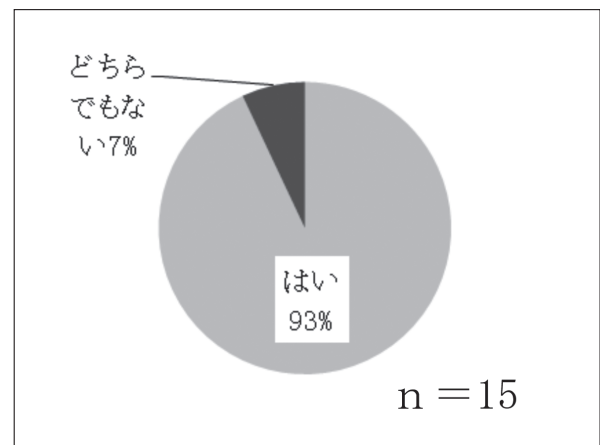


図3 WCF は、インシデント等患者の安全面に対しても効果的だと思いますか

の陰圧をかけていないのを発見し、医師へ陰圧の指示確認が出来ていないことがわかり、すぐに確認した」1名、「1日配りの内服薬の飲み忘れ」1名、「実際に自身がインシデントを書く回数が減っている」1名、【情報共有】「ドレーン等の性状を勤務開始前から一緒に確認できた」2名、【患者参画】「当日の検査の予定や絶食の有無を口頭で伝えることで看護師・患者双方で再確認する」1名であった。

「情報共有はスムーズに行えていますか」では「はい」9名(60%)、「いいえ」0名、「どちらでもない」6名(40%)であった(図4)。

「申し送り終了までの時間は短縮されましたか」では「はい」6名(40%)、「いいえ」0名、「どちらでもない」9名(60%)であった(図5)。

「申し送りを充実させるため、円滑に進めるために気をつけていることがありますか」では「はい」10名(67%)、「いいえ」0名、「どちらでもない」5名(33%)であった(図6)。自由回答では【申し送りの簡略化】【患者メモの改善・活用】にカテゴリ分けをした。内容の詳細は、【申し送りの簡略化】「患者にとってポイントになる情報をピックアップして申し送る」5名、「医師の指示などを中心に申し送りを行っている」2名、【患者メモの改善・活用】「PC内の患者メモ、記録に無いことを優先して話し時短に心がけている」3名、「患者メモへ必要な情報を記載し整理する」1名といった意見であった。

「申し送りの際に変わった事・注意するようになった事がありますか」では「はい」11名(73%)、

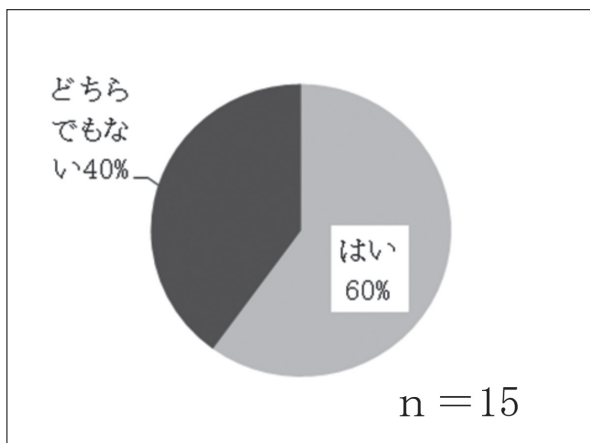


図4 情報共有はスムーズに行えていますか

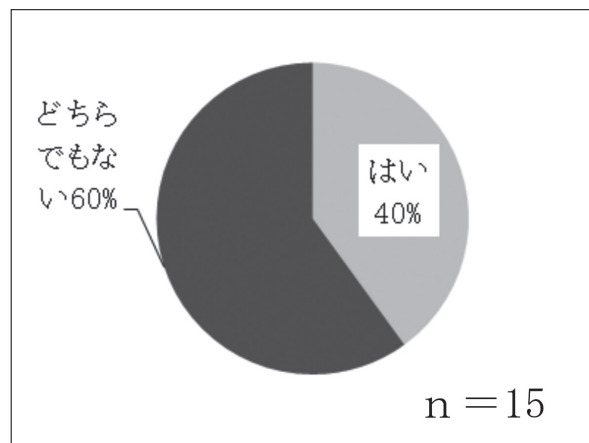


図5 申し送り終了までの時間は短縮されましたか

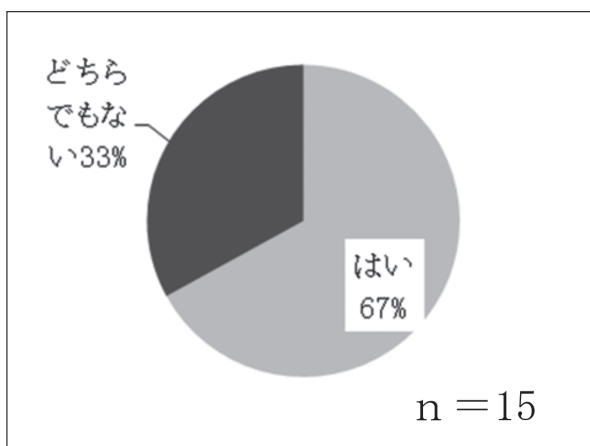


図6 申し送りを充実させるため、円滑に進めるために気をつけていることがありますか

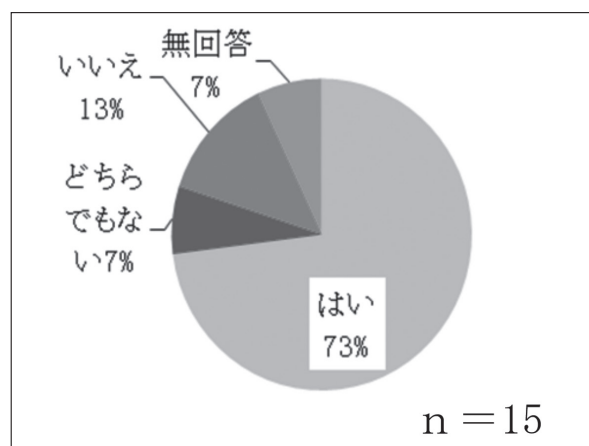


図7 申し送りの際に変わった事・注意するようになった事がありますか

「いいえ」1名(7%),「どちらでもない」2名(13%),「無回答」1名(7%)であった(図7)。自由回答では【情報共有】【個名情報の取り扱い】にカテゴリー分けをした。内容の詳細は,【情報共有】「患者への声かけでも情報を得られるようにする」5名,「点滴,創部,ドレーン類は一緒に確認するようになった」4名,【個名情報の取り扱い】「プライバシーに気をつけるようになった」2名,「第三者に聴かれてしまうことを意識している」1名であった。

「患者のプライバシーに配慮していますか」では「はい」11名(73%),「いいえ」0名,「どちらでもない」4名(27%)であった(図8)。自由回答では「声の大きさに気をつけている」5名,「病名や聴かれてはいけない内容は患者のそばで話さないようにしている」4名,「カルテ画面を最小化したり,画面を閉じるようにする」1名であった。

「今後もWCFを継続したいと思いますか」では「はい」15名(100%),「いいえ」0名,「どちらでもない」0名であった。

考 察

多くの看護師がWCFを開始してよかったと回答している。WCFを実践して「患者の状態を共有しやすい」「患者をみながら申し送りをする事でドレーンの排液や創部の状態確認できる」との結果であった。西野ら⁵⁾は「ベッドサイドで複数の看護師

の目,耳,手で触れて相互に観察することで情報を共有し,統一したケアを提供することにつながっており,WCFの継続は意義があり医療の質と安全の向上に結びついていると考えられる」と述べている。WCFでは,ベッドサイドで実際に患者の表情や点滴・創部状態・ドレーンの排液状況をタイムリーに観察しながら申し送りを行うことで,共通した意識を持ちケアに活用できると考える。また,複数人で観察しながら申し送りを行うことは,状態を把握し,フィジカルアセスメントを行うことで合併症予防や異常の早期発見に繋がっている。これらのことからWCFは,患者の状態把握の面で有益であると考えられる。さらに,現状を共有することで,早期離床に向けたケアや日常生活動作(Activities of Daily Living,以下,ADL)拡大への支援を共に考え共通認識を持ち看護実践していくことができる。

また,WCFは患者のメリットとして「見てもらっているという安心感に繋がる」「自分のことをちゃんと伝えてくれている実感がある」「検査や手術などその日のイベントと注意点を患者と一緒に確認できる」という結果であった。岡田ら⁶⁾も「ウォーキングカンファレンスは,多くの患者に看護師を身近に感じ・安心感・信頼感をもたらし患者への満足につながっている」と述べている。WCFの場で,当日の担当看護師を明確に伝え,手術・検査の予定とその注意点を患者と共に確認することで,患者は担当の看護師や1日のスケジュールを把握でき,安心感につながっていると考える。さらに,申し送りの際に看護師が患者から直接,症状や状態を聞くことで情報が正しく把握でき,詳しい症状を質問し確認することで,病態をアセスメントし,異常の早期発見や患者それぞれに合ったケアや支援に繋がると考える。また,申し送りの場面では,看護師は患者への不安の軽減を図る言葉がけや励ましにより,信頼関係の構築へ繋がっている。このことから,WCFは患者へ安心感を与えるなど,精神的安寧へも効果があることが明らかとなったのではないかと考える。

WCFは患者の安全面に対しても効果的であると考える。「1日配りの内服薬の飲み忘れ」「ドレーンの陰圧をかけていないのを発見し,医師へ陰圧の指

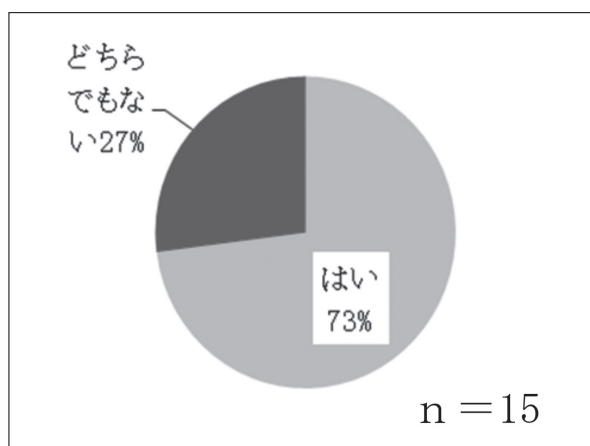


図8 患者のプライバシーに配慮していますか

示確認が出来ていないことがわかり、すぐに確認した」「毎日身体抑制カンファレンスができるようになった」の結果があった。複数の看護師で確認を行うことで、内服薬の飲み忘れに気づき、ドレーンの異常を早期発見し的確な対応をすることができたと考える。また、患者が治療に参画し情報共有を行うことで患者の治療に対する理解を得ることができ、インシデントの予防に繋がると考える。さらに、せん妄・認知症のある患者の状態を観察し、生活のリズムを整える、肯定的な対応するなど、看護師が統一したケアを行うためのカンファレンスが実践できている。これにより患者が安全・安楽に過ごせるような環境を整えるケアに繋がっていると考える。しかし、せん妄予防ケアを行っていても、必要に応じて身体抑制を行うこともある。その際には、身体抑制の必要性についてアセスメントし転倒予防、抑制解除に向けた対策を考える場となっている。これから WCF は、インシデントを未然に防ぎ、危険予知する機会になっていると考える。

そして、今後の工夫や課題も明らかになった。情報共有はスムーズに行えているかについては「はい」が6割、申し送り終了までの時間は短縮されたかの問いでは「はい」が4割という結果であった。この結果から WCF への変更は、時間短縮に対して十分な効果を得られていないと考える。しかし、患者メモに記載のない事項を優先的に申し送り、ポイントとなる情報をピックアップする、内容を整理し不要な情報を減らすなどの時間短縮に向けた取り組みが行われていた。これらは、申し送りを簡略化するために個人的に行っている方法であり、今後患者メモの充実とその内容の整理などを具体的に検討し、病棟看護師間で周知し統一する必要があると考える。また、時間のかかっている内容について調査し、対策を検討していく必要があると考える。

そして、WCF において患者のプライバシーへの配慮が大切である。「第三者に聞かれてしまうことを意識している」「病名や聞かれてはいけない内容は患者のそばで話さないようにしている」という結果であった。看護師と患者がベッドサイドで情報共有することの受け止め方は同じではない。岡田ら⁷⁾は

「患者の異なる価値観に対し、私たち看護師はそれを見抜く高い洞察力が必要である」と述べている。WCF は患者にとって安心感を得られる、看護師へ話しかけるきっかけになるなど肯定的な患者だけではなく、苦痛や悩みを第三者に聞かれたくないと思う患者もいると考えられる。そのため多床室のベッドサイドで申し送りを行う際には、申し送りの声の大きさや内容などに注意が必要である。また、患者の性格、同室者との関係性にも気を配り、患者によっては、ナースステーションで申し送りを行うなど場所の工夫も必要である。さらに、個人情報の観点から電子カルテをベッドサイドで使用の際は、置き場所・取り扱いなどに配慮が求められる。今後 WCF において患者のプライバシーへの配慮について検討していく必要があると考える。

WCF 導入に対してすべての看護師が今後も継続を希望するという結果であった。これは看護師間の情報共有だけでなく、患者と看護師との情報共有の場となり、患者の安全面においても有益であると考えられる。また、大内⁸⁾は「ウォーキングカンファレンスの話し合いは、皆で見て看護を評価することに繋がっており、看護の価値への気づきになっている」と看護の評価をフィードバックする重要性を述べている。WCF は申し送る側が申し送りで情報を伝えるだけではない。複数人で状況を確認し、アセスメントした内容をディスカッションする教育の場としても意義があると考えられる。

結 論

1. すべての看護師が WCF の継続を希望した。
2. WCF は患者の安全面に対して効果的であると回答したのは9割であった。
3. 申し送りの時間短縮に繋がったと回答したのは、4割であった。

おわりに

本研究を通して WCF は患者参画型であり、看護師と患者での情報共有は、患者の安心感に繋がっている。さらに、複数人でアセスメントをすることで患者の安全管理の面でも有益である。一方で申し送

り短縮に向けて、患者メモの記載内容や活用方法を検討することとプライバシーに配慮するという課題が明らかになった。また、今回の研究では看護師側のみを対象として研究を行ったが、今後は患者の意見を取り入れ WCF を充実させていきたい。

引用・参考文献

- 1) 中村恵子, 藤田智成, 上島美香, 他: 精神科病棟におけるウォーキングカンファレンスの現状と課題 看護師への意識調査を通して, 日本精神科看護学術集会誌 57 巻 3 号, 319-323, 2014.
- 2) 西野麻梨子, 西村章子, 坂本智子, 他: 療養病棟におけるウォーキングカンファレンスの有益性に関する検討, 日本精神科看護学術集会誌 61 巻 1 号, 64-65, 2018.
- 3) 高宮久美子, 相谷麻紀子, 増田加奈子, 他: ウォーキングカンファレンスの有効性 アンケート調査から 6 ヶ月間の実施状況を振り返る, 葦 36 号, 126-129, 2005.
- 4) 大月薫, 河野君江, 金子千恵子, 他: 透析室におけるウォーキングカンファレンスの有用性, 長野県透析研究会誌 (1346-0005) 27 巻 1 号, 29-31, 2004.
- 5) 前掲 2), 65.
- 6) 岡田望, 安田ゆかり, 船城啓子, 他: ウォーキングカンファレンスの有効性 患者満足度, 個人情報について, 葦 37 号, 122-124, 2007.
- 7) 前掲 6), 124.
- 8) 大内暁子: ウォーキングカンファレンスを活かした乳幼児の看護, 日本小児看護学会誌 Vol. 26, 8-14, 2017.
- 9) 最上和子, 中村光子, 下浅有子, 他: 看護業務の実態調査(その 2), 市立三沢病院医誌(0917-2521) 12 巻 1 号, 43-47, 2005.
- 10) 本島茉那美, 林美奈子: 既婚女性看護師の仕事と家庭の両立支援策の利用状況と希望する支援, 健康科学研究第 11 号, 61 - 68, 2018.

